

ることはあまりに残酷である。我々が法律で満足出来ないのはこゝにある。平等に悪を懲し善を勸むるものであつても、それは犯したその行爲のみ標準として、善惡の基礎條件をつけるからだ。その惡人がのがれたい必死の運命にもがいて尙救われんとする所に、底知れぬ人間の美しさがある。而してそれを求めて行所に宗教はある。そして眞の人間の精神生活の實踐窮行は我が日蓮聖人の宗教であり信仰あるのみである。

始めての映畫布教に際しまだ外に布教日記と感想を記したいと思ふが原稿の制限上こゝで筆をとめる。最後に映畫のみでなく、布教傳道にすべて國家及び宗門を憂る人々は至心努力を以て我祖の大精神を宣揚して頂き度いのある。巡回に對し御懇切なる御盡力を賜つた各所の方々に感謝し御健在と宿緣益々深からんことを祈願しこゝに擱筆する次第である。

唱題得意論

田 中 義 正

初夏のすがくしい朝、心行く迄御報恩の題目を唱えて室に飯り、一信者の訪れに對して以下賢問愚答を擧げます。

「本宗に於て、お經を懸命に多讀大唱するのと、一心專念に心靜かにお題目を唱え奉まつるのと、どちらが宣敷ですか御尋ねします」。

「そうですね、僕等も其事に就ては大いに研究しなければなりません」

法華經神力品に「以要言之如來一切所有之法乃至皆於此經宣示顯說是故汝等於如來滅後應當一心受持讀誦解說書寫如說修行」文壽量品云「此大良藥色香味皆悉具足汝可取服勿憂不差」と御示しになつてゐます。又安樂行品には「於後末世法欲滅時受持讀誦斯經典者無懷嫉妬諂誑之心」陀羅尼品には「受持法華名者福不可量」と御座います。以上は御經文を少し出したのですが、御祖師様の御文章の中に之等を丁寧にお教え下さつてあります。

本尊鈔に「釋尊因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す、我等此五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を讓與へ玉ふ」四大聲聞の領解に云く「無上寶珠不求自得」(九三八)又四信五品鈔「問ふ、其義を知らざる人唯南無妙法蓮華經と唱へて解義の功徳を具するや否や。答ふ、小兒乳を含むに其味を知らざれども自然に身を益す乃至妙法蓮華經の五字は文にあらす其義にあらす唯一部の意のみ初心の行者

其の意を知らざれども而も之を行すれば自然に意に當る也」 血脈抄には「妙法蓮華經と唱へ奉る處を生死一大事の血脈とは云ふ也。此事日蓮が弟子檀那の肝要也」或は「唱へ奉る妙法は是三世諸佛所証の境界」文其他諸法實相抄、當體義鈔、宗門緊要集、其他の遺文に見えてゐます。

法華經は佛陀出世の本懷本地甚深秘藏を打ちこめました釋尊の御精神の結晶で有ります。我等末法の下機下根も等しく之を唱へ以て修行すれば等しく即身成佛の妙果を得る大慈悲の色香味の具した良藥です。一部二十八品の文々句々を五字の妙法蓮華經にしたもので一代佛教の心髓要中の要です。

「では二十八品に妙法蓮華經の五字の色香味を解釋してあるのですか」
「そうです」

「それでは玄題ばかり唱ふる初心行者、もいつしか自然に其の妙味を認識し、實際に行ひにうつして行く事は出来るのですか」

「そうです」

或人は云ふでしやう、卅一年の現代生活者は尖端化され、智的生活に靈的生活は支配され、光なく望なくいら／＼した生活をやつてゐる人々に、長く一部八卷を讀誦しなくても題目を精神をこめて唱えたならそれでよいではないかと、一理あることばです。

乍然、經文の文義を靜かに訓讀して行く時、何んとも申されない靈的に喜びを感じる時を持つた事があります。

「御座います。早朝本尊室にお参りして心行くまで皇國隆盛、陛下萬歲、五穀成就、萬民快樂と御經の後で唱えました時には、何を以ても購ふ事の出來得ないものを得た感じに打たれます。此の間の正しい朗かな氣持ちで事務を取ると云ふ事は、誠に信仰したものでなければ經驗出來ない事です」

「さうです。其氣持で一般世間の人々が生活して行くなれば、階級鬭争、勞動争議、やれ何デモ示威運動等は、確かに次第くと影を薄くして行く事でせう」

御祖師様の御日常も傳導折伏時代はどういふ風に御讀經してゐられたか知りませんが、佐渡ヶ島根三味堂に流罪の身となつた時は、確かに罪人ト違は法悦境中の人上行日蓮であつたでせう。又身延九ヶ年の御日常はいふ迄もなく、御報恩てふ眞心は五十丁の山坂を登られて、房州の方、雲か霞か其中に、苦むした師匠父母の御墓はあの邊と御經御讀誦あそばされた事と思ひます。現在残る奥の院の靈地は無言に之を物話つゐます。そして末代に孝の亀鑑を不文の内に教示されたものです。

話か横道に行きました。

要するに三寶様に依つて信を起し三秘に依て行を立てた信行が唱題となつて顯れ成佛と云ふ安心が

得られるのです。正助二行、讀誦辨惑、讀誦得意、三業謗正等色々の問題がありますが、本門のお題目南無妙法蓮華經は信行の法体行相であります。一代佛敎否法界の神靈十方の聖哲も以て父とし、三世の如來は以て母とすべきです。世界廣しと雖も七字の題目程内容に於て秘密森羅萬象宇宙の妙味を含む者にして、又統一せられた題目は無いので有ります。我々は此釋尊因行果徳の二法を具備した題目を唱ふる事によつて、我々の人格を磨き行くのを本化の唱題得意とします。一度唱ふれば無始の重障も消え益々我々の精神修養と云ふ日常道徳の聖典で有ります。題目は之れ本化日蓮の魂魄で有り主義で有り生命で有ります。

末法の現代は絶對妙行を云は但受持一行あるのみ、相對的にいへば正助の二行あれ共、信念唱題が肝要です。即ち題目宗です。

初心后心を問はず、唱題する事によつて眞に自己の信仰を愈々強盛にする所の楔でもあり、我々の精神生活の糧でも有ります。妙法蓮華經に南無して行く即ち境智冥合の本尊と我等と団体して行く事有ります。

「今迄の私の疑問も解け愈々題目宗の徒となり、本化の正しい現代の信仰道に進んで行きます。有難御座いました」

以上一篤信者との對話を、綴り賢聖の御批判御教正を待ちます。南無妙法蓮華經 以上

人間生活と物

古 谷 智 謙

人間生活と物——それは切つても切れない關係にある、人間生活は物が無ければ營まれないからだ。その關係を御妙判に拜すると、『但有待の依身なれば着ざれば風身に泌み、食はざれば命持ち難し。燈に油を注がず、火に薪を加へざるが如し、命いかでかつぐべきやらん。命つづき難くつづべき力絶てば、或は一日乃至五日既に法華經讀誦の音も絶えぬべし』〔縮一八五九、松野殿女房御返事〕と、本化上行の御身もやはり人間的生活には變りはなかつた。

物——とりわけ衣食だけでも吾人の生活から引離すことの出来ない關係にあるのだ。故に物を離れて吾人の生活はなく、吾人生活のすべては物だとさへ云ひ得る。

然しながら物のみの生活——、それが人間生活の理想であつてはならないのだ。